概　要　報　告

実施期日	８月　３日(木)
部　会　名	小学校　算数部会

神奈川県研究主題　主体的・ 対話的で深い学びの視点からの授業改善

テーマ

『協働で創造する授業を目指して
～既習事項に立ち戻り、論理的な説明ができる子を目指して～』

提案概要

年度当初、学力差を埋めるための手立てとして、クラス単位のチームティーチングを行ったり、学年で少人数の３グループに分けて学習したり、学習内容毎にそれぞれの良さをいかして学習形態を選択して進めた。児童は自分のペースに合った環境で安心して学習に取り組むことができ、普段はなかなか意見を発表しない児童も自分の考えを発表できるなどの成果が見られた。一方で理解がゆっくりな児童が多いグループでは、対話的で深い学びに結びついていないのではないかという課題が見えてきた。

この課題意識から「多様な意見に触れながら、協働で創造する深い学びのある授業」を目指したいと考え、クラスでの一斉授業を中心として以下の２点を重点に授業に取り組んだ。

①児童の前時の振り返りから次時につながる課題を設定できるようにする。

⇒振り返りの視点（※たこつな）を明確にしたことで、振り返りの質が高まった。そしてその振り返りをもとに、次時の授業づくりを行っていった。

※たこつな…今日の㋟いせつ、㋡うやって解決したよ、㋠かった知識、㋥るほどと思ったこと

②自力解決の時間と友達との意見交流の時間を設定し、そこでの考えをいかして学級またはグループ全体で共同思考することで、考えを深め、まとめられるようにしていく。

⇒全体へ説明する児童が、全体に話が伝わっているのか確認しながら進め、聞いている児童も「わかる」「？？」の反応をするという形を大切にして進めていった。

質疑応答

３グループを子どもと決める時、どの様な基準を示したのか

３つのグループの説明を文章で提示した。子ども達は自分の実力だけでなく、学び方をイメージして主体的に選んでいた。教師側からみて判断がおかしいなと思う場合は理由を聞くこともあったが、理由を聞くとみな妥当な判断だと感じた。またグループ間の途中移動は常にできるようにした。図形ならばこのグループかなと単元ごとにグループが変わる子もいて、主体的に選択する姿を見ることができた。

「たこつな」をクラスにどうやって導入していったのか、振り返りの時間はどの位取っていたのか

振り返りのポイントを学年で相談したが、子どもたちにそのポイントを提示しなかった。「どういう振り返りが次の時間に活かせる振り返りになるか」と子どもに投げかけて一緒に作っていった。振り返りの時間については、初めは時間がかかっていたが、積み重ねていくうちに５分あればまとめられるようになった。時間内にできなかった子は、その日中に出す約束にしていたので、自主的に隙間の時間にやるようになっていった。

全体交流の際に、説明の順番を指示していたのか　話せる子が話してしまうというのが自分の悩み

説明の順番を意図して示したこともあるし、フリーにやることもあった。考え方を画用紙に書いて黒板に張り、書いた子と違う子が説明するということも行った。他の子が書いた考えを自分が説明することになるためグループでの話合いも活発になった。

協議の柱及び協議概要

協議の柱　　子どもの「今」を次の授業にいかす振り返りとは

協議の概要

◆振り返りの難しさや課題点

・振り返りは大事だが低学年だと書けない子が多い。また時間がかかるので子どもの負担感が大きいし、それを読む教師の負担もある。現実的に、毎時間振り返りを読んで次の時間の計画を考えるのは難しい。

・次の時間に活かすということを、その時間の中で振り返らせるのは難しい。また単元間のつながりを子どもたちに見つけさせるのは難しい。

・振り返りをすると授業時間が足りなくなってしまう。低学年は上手く言語化できない、何を書いていいか分からないため、面白かった、楽しかったなどの感想で終わってしまう。

・中学は振り返りをすると評価をしなければならなくなる。振り返りを書くことは、国語力が必要になってくるから、数学の評価として振り返りを用いることは難しい。

◆各校の実践と成果

【振り返りは視点、及び段階的・長期的に積み重ねることが大切】

・振り返りは視点が大切。時間が厳しいのは確かだが、短時間でもできるよう、教師の手立てで対応していくことが大切。例えば、「たこつな」４項目から一つ選ばせて書かせる、文量が多い時はその中でも大切なことに線を引かせることで教師の読む時間を短縮するなどが考えられる。様々な手立てを今後考えていきたい。

・振り返りは学んだことを自分の考えに残す。言語化することで当該教科の力だけでなく様々な力をつけていくもの。ねらい（視点）を明確にすることが大切。初めは書けないのが当たり前、積み重ねることで書けるようになる。確かに時間はかかるがそれだけの価値があるものだと考える。

・学年の段階に応じた振り返りの仕方が必要と感じた。例えば、低学年は先生が視点を与えて書くことから初めて練習する。そして高学年に向けて自ら視点を選択したり、教師が提示しなくても視点をもって振り返ったりできるように等の段階的な指導が必要。６年間を通して積み重ねて段階的に書けるようになれば良い。学校全体で方針を決められるとより効果的になる。

・子どもの振り返りだけでなく、振り返りを授業改善に生かせているのが良い。

・自分の学び方を振り返られるのがいいと思った。特にたこつなの「こ」がいいと思った。誰の意見が良いかとか、学び方をメタ認知して、自分・友達の良い所に気が付けるようになるという意味で参考になった。

【振り返りを取り組みやすくするための手立て】

・タイピングに時間がかかる低学年はノートに書いたものをロイロノートに写真で提出して共有する。

・学んだことを生かした適用問題を解くことを振り返りと位置付ける。

・振り返りシートを単元ごとに作り、ICT を活用して管理・共有する（スプレッドシート、クラスルーム）ことで教師も簡単に見る方法を工夫できる。

・時間が難しい時は、一文で表したり、口頭での振り返り（ロイロに録音）をしたり等も方法の一つ。

まとめ概要

子どもに寄り添い、子どもの思いや考えを大切にしたいという先生の願いが詰まった実践だった。学年で実践していたグループ別学習などの取り組みに課題を感じたことで年度の途中でやり方を変えるといった、目の前の子どもの実態に合わせて授業を改善していく（しかも学年で）姿勢が印象的だった。

その手立ての一つとして提案された「振り返り」は協議会で意見が分かれた。「時間がない」「国語力のない子は書けない」などの意見があったが、一方で「資質・能力を育てるためには大切」「積み重ねれば書けるようになる」「教師のねらい（視点）や学年段階に応じた工夫が大切」「学校全体で取り組んでいけるとより効果的」などの視点で各校の実践を共有できた。教師の工夫や積み重ねによって子どもと教師の負担感は減り、学習効果が高まっていくことが分かった。今後、振り返りがより重要になってくることを再確認でき、また様々な実践の可能性があることを感じた協議となった。